

# 働き女子のごほうびセミナー

## 「働くということ」

### 4. 私にしかできない仕事

千葉：最近のお仕事はどのような感じですか。

庄子：震災の次の年度に、新しく再生可能エネルギーの推進をする課ができたんです。新エネルギー推進課というところで、その課長を2年やりました。原発被害があったので、当時の市長が脱原発のために再生可能エネルギーを普及しようということで、そのような仕事をしていました。そのあとは中央図書館の館長に異動しました。



千葉：だいぶ今までと違う職場ですよ。

庄子：ですね。初めて教育委員会に行きました。実は学生のとき司書の単位を取っていて図書館司書の資格を持っているのですが、実務はやったことがなかったんですね。震災があって、市民課でいろんな震災時のものすごい混乱を経て、再生可能エネルギーという、復興の象徴的な政策をやりながら、中央図書館に行きたくなってきたんですね。というのは、今回の震災でいちばんの被害者って子どもたちなんですよ。本当に学べる大切な時期に何か所も避難をしたり、残った子も行動が制限されたり、お父さんだけ戻ってお母さんと避難をして家族がばらばらになっていたりして、そういう子どもたちになんとかいい環境をつくってあげたいというのが一つありました。あとは、南相馬の復興に向けて、壊れた

建物を戻すだけではなく、人口が少なくなってもここ南相馬をしっかり考えてくれる市民がいるまちにしたいという思いがあったんですね。そのためには図書館というのが非常に可能性があると思っていました。図書館というのは子どもたちの読書から、公共性もはぐむ場なんですね。あとは、震災でいろんな思いを持った大人たちが図書館でちょっとゆっくりして、自分の人生やまちを考えてもらえたらと。壊れた建物を直すのは多くの職員ができるけど、図書館の仕事は私しかできないと思ったんですね。あとは、図書館の建設から携わってきた本当に優秀な職員が辞めちゃって、私に何かできないかという思いもあって、図書館には3年いました。

千葉：「私でなければやれなかったこと」ってどんなことですか。

庄子：そうですね。まず、図書館って好きな人は来るんですけど、本を読まない人は来ないんですよ。だから、まずは図書館に来てもらおうということで、たくさん催し物、イベントをやりました。特に子どもたちの読書教育には力を入れて、図書館に来ると夏休みの宿題が全部できますというのをキャッチフレーズに、子どもたちに夏休みに図書館に来てもらうという運動みたいなことをしたり、あとは、館内のカフェを運営している障がい者支援団体のみなさんが講師になって、和綴製本のメモ帳をつくる市民向けのイベントをしたりして、できるだけ図書館に関わっている人を巻き込んでいろんな事業をやっていきました。それから図書館の神髄である資料ですね。図書館の資料をできるだけ広範囲にいろんな人が興味を持つように集めて、かつ、普通の分類法ではなく、いろんなテーマで棚をつくるなどの工夫もしました。あとは、移動図書館の導入もしました。なかなか図書館に来られない高齢者のいる仮設住宅、復興公営住宅、あとは幼稚園、保育園などもまわりました。そんなことで、できるだけ図書館が身近にあるようにしていきたいと取り組みました。



千葉：じゃあ、本当に庄子まゆみさんじゃないとできないことを3年間でやったわけですね。

庄子：いや、ちょっと言いすぎましたけど。

千葉：十分やったということですよ。

庄子：ずっといたかったですけど。そのあとは、教育委員会事務局の教育総務課というところで教育委員会の事務局の総務的なところを1年間やって、それから復興企画部長の3年目です。

千葉：じゃあ、ここ10年は本当に震災復興に関わるいろいろな部署をまわって、最後はいちばん総括的なところに就いたということですよ。

庄子：はい。

千葉：一つお聞きしたいことがあるんですが、この図書館を市民の方々が交流できる場所、または市民活動の拠点にしたいと思ったということですよ。市民との関係が大事だということはどの時期から意識されたのでしょうか。



庄子：そうですね、市民との関係を意識したのは、私が福島の「シンクタンクふくしま」にいた時期ですかね。

あのときにちょうど2000年にNPO法が施行され、NPOという新しいセクターができたことですごく市民というのを意識しました。それが一つですね。

あとは、この図書館は女性たちの市民運動から始まったんですね。それまでは文化センターのワンフロアに図書館があったんですが、もうちょっと広くていろんな可能性があるような図書館が欲しいという市民運動が出てきて、そこからおつきあいが始まりました。結局、この図書館は市民運動の帰結であると思っていて、やはり市民の力というのはものすごく大きい。それも多くは女性たちがその運動をしてきて、この図書館と姉妹館のような形になっている伊万里の市民図書館も市民運動から始まった図

書館で、自分たちに必要な施設とか機能とかを市民が積極的に自分たちで考えて提案していくというところにすごく自治の芽を見たというか、そんな気がします。

この図書館を建てるプロセスも市民検討委員会があったり、私たち職員の検討委員会があったり、あとは設計も公開のプロポーザルだったりして、いろいろ開かれた形でやってきたんですね。そういうことで、結果としていい施設ができたり、いい図書館の運営になったりして、そこで市民をすごく意識することになったと思います。

千葉：この図書館自体が市民運動の成果として出来上がっているというのはすごいことですね。

庄子：すごいですね。毎日、ある主婦の方が当時の図書館館長のところに通って、いろんな資料を出されていたと聞いています。彼女自身図書館を勉強し、図書館は貸本屋ではないというところをはっきり言われていました。最近はサードプレイスなどといって、第3の居場所だという人もいるし、アメリカでは民主主義の根幹を成すところが図書館で、いろんな支援をしているんですね。図書館から福祉や教育、いろんなことを図書館が発信している。その主婦の方はそれをご存じて、その方が中心になって、周りを巻き込んで、本当に長い時間をかけてここをつくっていった、というところがやっぱりすごいですね。私たちも、そういう市民がいると緊張するというか、負けてられないと、そういうことがありますよね。

千葉：ここは恵まれた職場であり、上司の方々もおられて、そこで出会う女性の自治体職員や、地域にいる女性市民、そういう人たちとの交流、場合によっては緊張するような場面もありながら、まゆみさんがたくましく成長してきたのかなという気がするんですが。

庄子：はい。育てられてきました、私は。